

独和辞典で使用されている／r／と／l／の仮名表記の問題：日本語を強い言語、ドイツ語を弱い言語とする二言語使用児の／r／と／l／の聞き分け様式に関する調査を参考資料として

Kasjan, Andreas
九州大学大学院言語文化研究院言語科学部門・言語教育学

<https://doi.org/10.15017/6796424>

出版情報：言語科学. 38, pp.79-89, 2003-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



独和辞典で使用されている/r/と/l/の仮名表記の問題

ー 日本語を強い言語、ドイツ語を弱い言語とする二言語使用児の/r/と/l/の聞き分け様式に関する調査を参考資料として ー

Andreas Kasjan

0. 序

ドイツ語の/r/の発音は日本語を母語とするドイツ語学習者にとってだけでなく、ロシア語やポーランド語、スウェーデン語や英語を母語とするドイツ語学習者にとっても大きな問題である (Dieling 1992, 30)。日本人学習者の場合は、日本語では/r/と/l/の区別がないため、この2つの音を聞き分けることは非常に難しい。この問題は、ドイツ語教師の最大の悩みの一つであると言える。

本稿では、『新アポロン独和辞典』(根本他 2002) と『アクセス独和辞典』(在間他 2002) で使用されている、/r/と/l/の仮名表記に関する問題を検討したのち、日本語とドイツ語の二言語使用児の聞き分け様式に関する調査結果を紹介する。この調査結果に基づいて、本稿では/r/と/l/の仮名表記について新しい提案をしたい。

1. ドイツ語の発音を仮名で表記する場合の問題点

ドイツ語の発音を仮名で表記することが、日本のドイツ語学習に悪影響を与えるかどうかという問題については、対照実験に基づいた研究は未だにないので、現段階では客観的に判断することはできない。しかし、英語を第一外国語とする日本人学生がドイツ語を学び始める時、同じラテン文字を使う英語の発音がドイツ語への言語干渉を起こすことは、ドイツ語教師の間でよく知られている (田中 1996, 48)。その言語干渉を避けるため幾つかの方法が考えられる。

それは第一に、ドイツ語の入門期に文字を使用しないで、発音を口頭だけで教える方法である。実は、この方法は60年代ヨーロッパでは、行われていたが、様々な問題を引き起こしたために、その後、ほとんど用いられなくなった (Dodson 1967, 11-36; Butzkamm 1980, 57f. 参照)。確かに、ドイツ語教師には、文字の使用が学習者の発音に悪影響を与えるという経験はある (Michel 1991, 115; 田中 1995, 176) が、文字の悪影響を避けるために、筆者は以前 (カスヤン 1997, 3) 次の方法を提案した。発音を教える時は、文字を使用するが、新しい表現や単語を初めて学生に発音してみせる時には、学生が文字を見ないようにする。また、学生が教師に従って表現や単語を発音する時にも、文字を見ないようにする。ただし、一人の学生が発音する時には、他の学生は文字を見て

もよい。また、発音しようとする学生が表現の内容を途中で忘れてしまった時にも、文字を見てもよい。この方法では、教師の発音の方が主要な刺激になり、文字は発音という刺激を補強する役割を果たす (Dodson 1967, 17f. 参考)。

第二は、仮名でドイツ語の発音を説明する方法である。確かに、ラテン文字を使う言語の話し手にとっては、同じラテン文字に外国語では違う発音があることは当然なことである。それに対して、日本語の仮名は日本語のコンテキストにしか使用されていない。そのために、特殊な例外を除いて、一つの仮名には一つの発音しかないの、仮名ではあくまで日本語並みの発音しかできない。従って、普通使われている仮名では、表記できない外国語の子音や母音がたくさんある。例えば、日本語では5つの母音しかないのに対して、ドイツ語では15以上の母音がある。また、ドイツ語の /r/, /ch/, /w/ のように日本語にない子音もある。しかし、そうだからといって、ドイツ語の発音を説明する際に、仮名をまったく使わない方がいい、という結論は早まっている。仮名で表記できないドイツ語もあるが、長母音と短母音の違いや語末子音の無声化のような現象は、すべて表記できる。また、完璧に仮名による表記できない発音があっても、学習者が仮名表記のお陰で「当該の単語の発音を大まかに把握」(本田/吉中 1994, 28) できる。そのために、ドイツ語授業の入門期に発音を教えたり、独和辞典などで発音を表記したりしする時には、仮名も使用すれば、学習者に役立つことはありうる (同上)。

第三に、国際音声記号を積極的に使う方法である。これはまさに理想的な方法であるが、学生は国際音声記号をこれまで英語の授業で勉強したものの、それを身につけた学生はそんなに多くはないと思われる (同上, p.27)。また、国際音声記号を勉強しただけで、外国語の発音が上手になるわけではない。例を挙げると、「長い」を意味するドイツ語の “lange” という単語の発音は [laŋə] と表記するが、日本人学生は英語の勉強から [ŋ] という記号を知っているのに、[laŋə] を間違って [langə] または [laŋgə] と発音することが多い。それにドイツ語では、[y] [ɪ] [œ] [ø] [ʊ] [ç] [x] などのように英語にはない母音と子音も少なくないから、それらの国際音声記号を学生に勉強させることは、時間的には無理なところもある。

上述のことをまとめると、ドイツ語の入門期に発音を教える時、または独和辞典などでドイツ語の発音を表記する時には、国際音声記号だけでなく、仮名も使うのが理想的な組み合わせと考えられる (同上, pp.27f.)。しかし、この仮名の使用はあくまで一時的な手段にすぎない。

2. /r/と/l/を仮名で表記する問題点

ドイツ語の/r/には環境によって、子音として発音する場合と母音として発音する場合がある。簡単に言えば、語末の/r/や語中における長母音の後の/r/は母音化される。しかし本稿では、この/r/は論じない。

子音として発音される/r/は、標準ドイツ語では異音は3つある。つまり、震え音である歯茎音の [r] と口蓋垂音の [ʀ] および摩擦音である口蓋垂音の [ʁ] である。なお、ドイツ語では、歯茎音の [r] は歯茎音の [l] とは非常に似ているため、外国語授業では学習者に口蓋垂音の [ʀ] または [ʁ] を勉強させることが望ましい。授業での/r/の説明と練習については、本稿の結論で述べる。

上述のように、学習者向けの独和辞典では、ドイツ語の発音を表記するために、国際音声記号の他に仮名を使う辞典もあるが、本稿では『アクセス独和辞典』と『新アポロン独和辞典』の仮名表記について論じる。『新アポロン独和辞典』では、/l/と/r/は平仮名のら行とカタカナのラ行で表記されているが、『アクセス独和辞典』では/l/と/r/は両方ともカタカナのラ行で表記されている。従って『アクセス独和辞典』では、「赤」を意味するドイツ語の単語 "rot" と「測鉛」を意味するドイツ語の単語 "Lot" は両方とも [ロート] で表記されている。それに対して、『新アポロン独和辞典』では/l/は平仮名で、/r/はカタカナで表記されていて、"rot"は [ロート]、"Lot"は [ろート] になっている。

ここでは、/l/と/r/の仮名による表記を論じてみよう。ドイツ語の [l] と日本語の弾き音 [r] の調音位置は同じで、日本語の音声組織の中では [r] はドイツ語の [l] と一番近い音と言える。しかし、ドイツ語の [ʀ] の調音位置は日本語の [r] の調音位置とはかなり離れているので、ドイツ語の/r/の発音をラ行で表記することは望ましくない。論理的に言えば、日本語の音声組織の中では、[ʀ] に一番近い音は、ガ行で表記されている鼻音の軟口蓋音の [ŋ] である。日本語では、この音は [g] と [k] の異音であり、標準語では「案内」と「三階」の「…外」と「…階」は両方とも [gai] と発音する。

しかしそうかといって、ドイツ語の/r/の発音をラ行ではなく、ガ行で表記することは、また別の問題を引き起こす。なぜなら、ドイツ語の音声組織には/g/という子音もあり、この子音はすでに独和辞典ではガ行で表記されているからである。または、日本語ではガ行の/g/が [ŋ] で発音されているのは、特定の環境に限られている。それに、この音声変化は九州にはないので、九大生の中でそれを日常的に使う人は極めて少ない。ここでは、結論を出す前に、日本語とドイツ語の二言語使用児に関する調査を紹介しよう。

3. 二言語使用児の/r/と/l/の聞き分け様式に関する調査

調査対象になったのは、筆者の子供である小学校5年生の少女Aと小学校2年生の少女Bである。二人とも、日本生まれ、日本育ちであり、0歳から5歳までは、日本人の保育園に、現在は日本の小学校に通っている。日本人の母親と話す時、また日常生活では日本語を使うので、日本語が子供の「強い言語」(この概念についてはカスヤン 1997, 4 を参照) になっている。子供の日本語の発展は同じ年齢である、日本語のみ習得した他の子供と同じである。

ドイツ人の父親は、子供が生まれてからドイツ語だけで子供に話しかけている。子供は父親にもよく日本語で話しかけるが、父親はその時にも子供にドイツ語で話しかける。子供は毎年の夏休みをドイツで過ごし、ドイツの親戚やドイツ人の友達とはドイツ語で話し合う。しかし、ドイツ語を聞いたり話したりする時間が限られているので、ドイツ語が子供の「弱い言語」(この概念については同上を参照) になっている。子供のドイツ語の発展は、同じ年齢である、ドイツ語のみ習得した子供に比べてかなり劣っている。また、ドイツ語を読み書く能力は非常に乏しい。特に、書く能力はゼロに近い。にもかかわらず、二人ともドイツ語ができることを意識している。

少女Aが、小学校1年生の時、自発的にドイツ語を平仮名で書くことに興味を示した。その時は、ローマ字やドイツ語を読み書くことが全然できなかった。ある日、父親が「書く」を意味するドイツ語の [ʃraibən] を発音した時に、少女Aがそれを「シュガイベン」と書いた。のちほど、父親は、少女Aが父親の/r/をほとんど例外なくガ行で表記することに気付いた。また、少女Bが1年生になった時、彼女も父親の/r/をほとんど例外なくガ行で表記することに気付いた。2003年1月4日と2003年1月6日には、少女たちの/r/と/l/の仮名表記に関する調査が実施された。

3.1. 第一回目の調査

2003年1月4日に次の調査が実施された。筆者が少女Aと少女Bに26のドイツ語の単語と4つのドイツ語の文を2、3回読みあげ、それを仮名で書かせたり、和訳させたりした。この調査は子供一人一人に実施され、一人の子供が調査を受けた時には、もう一人の子供はその部屋にいなかった。一人の子供の調査が終わった後、もう一人の子供の調査が引き続いて実施された。第一回目の調査は録音されている。

3.1.1. 第一回目の調査で使った資料

第一回目の調査で使った単語と文は、以下のとおり、国際音声記号によって

表記され、和訳されている。発音の表記は、実験の録音に基づいて、作り出したものである。

1. [ro:t] 赤
2. [kry:n] 緑
3. [blau] 青
4. [braun] 茶色
5. [gɛlp] 黄色
6. [ɛtbe:rən] いちご
7. [himbe:rən] きいちご
8. [bi:ɐ] ビール
9. [ɔrɔŋzənzaft] オレンジジュース
10. [apfəlzaft] りんごジュース
11. [ko:la] コーラ
12. [rɛçts] 右
13. [lɪŋks] 左
14. [darmʃtat] (地名)
15. [fraŋkʃʊrt] (地名)
16. [frau] 女性
17. [ɔŋkəl] 叔父
18. [ɔŋkəlhe:rɔlt] (少女達の叔父の名前)
19. [le:zən] 読む
20. [ʃraɪbən] 書く
21. [prɪf] 手紙
22. [klaɪn] 小さい
23. [kro:s] 大きい
24. [pɪpɪlanʃtʁʊmpf] 長靴下のピッピー
25. [gʊt] 良い
26. [ge:bən] 与える
27. [ɡi:pmi:ɐmɐ:ldasdɪŋda:] ちょっと私にそのものをとって。
28. [vi:haɪstɔndasprɪçən] この人形の名前は何というの？
29. [ho:lmaldɛmpapaʊnbɪ:ɐ] お父さんにビールを取ってきて。
30. [du:bɪsta:bɛkro:sgəvɔrdən] 大きくなったね。

上記に見られるように、筆者の発音には、標準ドイツ語と異なったところも

ある。2番、21番、23番の標準の発音はそれぞれ [gry:n], [brɪf], [gro:s] であるが、筆者の場合は [r] の前の [g] と [b] が無声化される。9番の標準の発音は [orãjʒən~] または [orã:ʒən~] であるが、筆者の場合は鼻音の母音 [ã] が [ɔ] で発音される。しかし、これらの問題は本稿のテーマや目的には関係ないから、ここでは論じない。

実験では、筆者はドイツ語の /r/ を [r] で発音した。しかし、14番の [darm~], 15番の [-furt], 30番の [-gəvɔrdən] の場合は、母音に続く /r/ は母音の前の /r/ ほどう震えないために、母音に続く /r/ は [r] か [ʁ] のいずれであるかということは肉声だけでは、判断することができない。当分は、母音に続く /r/ も便宜的に [r] で表記することにした。

3.1.2. 第一回目の調査の結果

少女Aは全ての単語と全ての文を正しく日本語に訳した。少女Bは18の単語と全てのドイツ語の文を正しく訳した。しかし、この問題については論じない。少女Aと少女Bは、調査で使った単語の発音を以下のように表記した。

少女Aの仮名表記

1. ゴォットトゥ
2. クリュ ウン
3. ブラオ
4. プガオン
5. ゲルupp
6. エッペイェン
7. ヒンペイン
8. ビイェ
9. オゴンジェンザッフク
10. アッフエルザッフ
11. コーラァ
12. ゲッシュュッツ
13. リンックスく
14. ダームシュタットゥ
15. フガンフォットゥ
16. フガオ
17. オンケル
18. オンケルヘーゴルッ

少女Bの仮名表記

1. ご一つ
2. くーうん
3. ぶらお
4. ぶがおん
5. げるぶ
6. えやっべやげん
7. ひんべやげん
8. びや
9. おごんぐエンざふ
10. あっふエるざっふ
11. こーら
12. げっしー
13. りんくす
14. だんしゅたっつ
15. ふがんほっ
16. ふがお
17. おんける
18. おんけるへいごる

- | | |
|----------------|--------------|
| 19. レーゼンッ | 19. りいぜん |
| 20. シュガイベン | 20. しゅがいべん |
| 21. プギーッ | 21. ぶぎい |
| 22. クライン | 22. きらいん |
| 23. ッゴース | 23. こうす |
| 24. ピピランクッシュトン | 24. びびらんしゅとん |
| 25. グートゥ | 25. ぐうつ |
| 26. ギーベンッ | 26. ぎーべん |

少女Aがカタカナで、少女Bが平仮名で書いた。少女Bの平仮名には、長母音を一で表すという特徴がある。二人とも、同じ仮名表記を使ったのは3番、4番、16番、17番、20番、22番で、合わせて6箇所である。他の例には異なる仮名表記はあるが、ここでは/r/と/l/の仮名表記について論じる。

[r] が入っているのは1番、2番、4番、6番、7番、9番、12番、14番、15番（2回）、16番、18番、20番、21番、23番、24番で、合わせて16箇所である。その中で、母音の前に来る[r]は、1番、2番、4番、6番、7番、9番、12番、15番（前の/r/）、16番、18番、20番、21番、23番、24番で、合わせて14回である。母音の後ろに来る[r]は14番、15番（後ろの/r/）で、合わせて2回である。[l] が入っているのは3番、5番、10番、11番、13番、17番、18番、19番、22番、24番で、合わせて10箇所である。

少女Aが、[r] をガ行で表記したのは1番、4番、9番、12番、15番（前の/r/）、16番、18番、20番、21番、23番で、合わせて10回である。[r] を全然表記していないのは6番、7番、24番で、合わせて3回であり、[r] を長母音または長子音で表記したのは14番、15番の後ろの/r/で、合わせて2回である。[r] をラ行で表記したのは1回（2番）である。

少女Aの仮名表記には、次の傾向が見られる。母音の前の[r] はガ行で表記されたが、母音 [ə] の前の [r] のおよび [ʃr] というような子音結合の場合の [r] は全然表記されていない。母音の後の [r] は長母音または長子音で表記された。

少女Bが、[r] をガ行で表記したのは1番、4番、6番、7番、9番、12番、15番（前の/r/）、16番、18番、20番、21番で、合わせて11回である。[r] を全然表記していないのは2番、14番、15番（後ろの/r/）、23番、24番で、合わせて4回である。

少女Bの仮名表記には、少女Aと似た傾向が見られるが、少女Bの仮名表記の方が一貫したものである。少女Bの仮名表記では、母音の前の[r] はガ行で表記されたが、[kr] または [ʃr] というような子音結合の場合は、母音の前の [r]

は表記されていない。母音の後の [r] は全然表記されていない。

少女Aと少女Bが二人とも、[r] をガ行またはが行で表記したのは、1番、4番、9番、12番、15番（前の/r/）、16番、18番、20番、21番で、合わせて9回である。少女たちが二人とも [r] を全然表記していないのは、15番（後ろの/r/）、24番合わせて2回である。II) の仮名表記は、少女たちはそれを例外なくラ行またはら行で表記した。

次はドイツ語の文の仮名表記を紹介する。

少女Aの仮名表記

- 27. ギープミエマルッダッスディンダー
- 28. ウィハイッデンバッスプッシュェン
- 29. ホーレマルッデンババアインビエ
- 30. ドゥビッスアバクゴースゲヤーデン

少女Bの仮名表記

- ぎっぶみやまあるだすていんだ
- ういはいすでんだすぶっしゅん
- ほうるまあでいんばあいんびえ
- どうびすあばごうすでをうでん

ここでも、少女Aがカタカナで、少女Bが平仮名で書いた。この4つの文章には II) が全部で3回（27番で1回、29番で2回）あり、[r] が2回（30番）である。少女Aが、II) をラ行で表記したのは3回である。つまり、少女Aは、27番と29番の文の [ma:l] を「マル」で、28番の文の [ho:l] を「ホール」で表記した。少女Bが、II) をら行で表記したのは2回である。つまり、少女Bは27番の文の [ma:l] を「まある」で、29番の文の [ma:l] を「まあ」で表記し、28番の文の [ho:l] を「ほうる」で表記した。少女Aは30番の [kro:s] の [r] を23番と同じようにガ行で表記した。少女Bは30番の [kro:s] の [r] を23番と同じように長母音で表記した。少女Aは30番の [gəvɔːrdən] の [r] を長母音で表記したが、少女Bはその [r] を全然表記していない。

3.2. 第二回目の調査の内容

2003年1月6日に次の調査が実施された。筆者が少女Aと少女Bに10のドイツ語の単語を2、3回読みあげ、それを仮名で書かせた。これらの単語は父親によって作られたドイツ語らしい造語であったが、少女Aと少女Bにはこれらの単語は人名だと説明された。この調査は子供一人一人に実施され、一人の子供が調査を受けた時には、もう一人の子供はその部屋にいなかった。一人の子供の調査が終わった後、もう一人の子供の調査が引き続いて実施された。第二回目の調査は録音されていない。

3.2.1. 第二回目の調査で使った資料

この調査は録音されていないが、第一回目の調査の録音に基づいて、筆者の /r/ は [r] で表記することにした。

1. [re:hagən]
2. [ma:ɾiŋən]
3. [da:lən]
4. [la:mi]
5. [ku:laf]
6. [go:ɾoŋ]
7. [ʃa:ɾif]
8. [limgo:]
9. [kɾi]
10. [kla]

3.2.2. 第二回目の調査結果

少女Aと少女Bは、調査で使った単語の発音を以下のように表記した。

少女Aの仮名表記

1. ギリーハーゲン
2. マーギゲン
3. ダーレン
4. ラーミシュ
5. クーラフ
6. ゴォゴン
7. シャーギフ
8. リンゴー
9. クギッシュ
10. クラッシュ

少女Bの仮名表記

1. ぐぎは一げん
2. まーぎげん
3. だーれん
4. らみしゅ
5. くーらふ
6. ごーごん
7. しぁれふ
8. りんごー
9. くいっしゅ
10. くらしゅ

少女Aがカタカナで、少女Bが平仮名で書いた。少女Bの平仮名には、長母音を一で表すことと、7番の「しゃ」を間違えて「しぁ」で書くという特徴がある。二人とも、同じ仮名表記を使ったのは全部で5箇所ある。つまり、2番、3番、5番、6番、8番である。他の例には異なる仮名表記はあるが、ここでは /r/ と /l/ の仮名表記について論じる。

/r/が入っているのは1番、2番、6番、7番、9番で、/l/が入っているのは3番、4番、5番、8番、10番で、合わせて5回ずつである。少女たちが二人とも、/r/をガ行またはが行で表記したのは1番、2番、6番で、合わせて3回である。少女Aは、7番、9番の/r/もガ行で表記したが、少女Bは7番の/r/をら行で表記したが、9番の/r/は全然表記していない。

2番では7番と同じよう [r] に母音 [i] が続いているが、少女Bの場合は、2番と7番の/r/の仮名による表記が異なっている。9番の [kr] という組み合わせが仮名で表記しにくいため、9番の/r/をア行で表記したのかもしれない。

3番、4番、5番、8番、10番では、/l/の仮名による表記は同じであった。

3.3. 調査結果の総合分析

二回の調査結果をまとめると、次の傾向が見られる。少女たちは例外なく、ドイツ語の [ɪ] をラ行またはら行で表記する。母音の前の [r] は二回の調査を合わせると、19の例 (14+5) があったが、少女Aは母音の前の [r] を15回ガ行、少女Bは母音の前の [r] を14回が行で表記した。従って、少女たちには、母音の前の [r] をガ行またはが行で表記する強い傾向が見られる。また、母音の前の [r] をガ行ではなく、[r] を全然表記しないか、または、長母音で表記することもあるが、それはほぼ子音結合の場合の[r]に限られている。

母音の後の [r] の場合は、その [r] を全然表記しないか、または、長母音などで表記する傾向も見られる。しかし、この場合は筆者の発音がそれを引き起こしたと考えられる。3.1.1. で説明したように、筆者には母音の後の/r/を[r]で発音する癖があるかもしれない。最後に強調したいのは、少女たちがドイツ語の/r/をラ行またはら行で表記したのは1回ずつしかなかった。

このような結果に基づくと、日本語を強い言語として、ドイツ語を弱い言語とする二言語使用児はドイツ語の [ɪ] を日本語の [ɛ]、ドイツ語の [r] を日本語の [g] または [ŋ] として聞き分ける、という仮説が立てられる。日本語を強い言語、ドイツ語を弱い言語とする二言語使用児の言語習得における/r/と/l/の聞き分け様式に関する、研究はまだなされていないので、この仮説を証明または否定できるようにするにはさらに研究を続けねばならない。

4. 結論

本稿の目的は、独和辞典で使用されている/r/と/l/の仮名表記について新しい提案をすることであった。前述のように、ドイツ語の [r] の調音位置は日本語の [ɛ] の調音位置とはかなり離れていて、日本語の音声組織の中では、ドイツ語の [r] に一番近い音は鼻音の軟口蓋音の [ŋ] である。また、日本語を強い

言語、ドイツ語を弱い言語とする二言語使用児は、ドイツ語の [ɪ] を日本語の [ɛ], ドイツ語の [r] を日本語の [g] または [ŋ] として聞き分ける、という仮説が立てられる。しかし、ドイツ語の音声組織には/g/という子音もあり、この子音はすでに独和辞典ではガ行で表記されている。また、日本語ではガ行の/g/が [ŋ] で発音されているのは、特定な環境に限られているので、独和辞典でドイツ語の/r/をそのままガ行で表すのは望ましくない。これらの問題を避けるため、ドイツ語の/r/を日本語教育者・研究者によって使用されている「カキグケコ」(松崎/河野 1988, 93 参照) で表すことを提案したい。

授業でドイツ語/r/の発音を説明する時、筆者は先ず学生に日本語の [ŋ] という音を発音させる。それから、[ŋ] の口をやや小さくして、空気を強く口から出すように指導する。もし、独和辞典で、ドイツ語/r/の発音をラ行ではなく、カキグケコなどで表記したら、ドイツ語教師の仕事がかなり楽になるし、学生のドイツ語の発音もこれまで以上に正確なものになると思われる。

参考文献

- Butzkamm, Wolfgang 1980. *Praxis und Theorie der bilingualen Methode*. Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Dieling, Helga 1992. *Phonetik im Fremdsprachenunterricht Deutsch*. Berlin u. München: Langenscheidt.
- Dodson, C.J. 1967. *Language Teaching and the Bilingual Method*. London: Pitmann.
- Michel, Wolfgang 1991. „Einfache Schreib- und Sprechübungen für Anfänger.“ *Germanistische Studien*. 3, 114-116.
- カスヤン、アンドレアス 1997「ドイツ語の入門期におけるバイリンガル教授法」『言語文化論究』8号, pp.1-22.
- 在間進他 2002『アクセス独和辞典』在間進編者責任, 三修社.
- 田中俊明 1995「総合力向上のためのドイツ言語文化教育」『独仏文学研究』45号, pp.173-184.
- 田中俊明 1996「音声コミュニケーション能力について」『独仏文学研究』46号, pp.47-57.
- 根本道也他 2002『新アポロン独和辞典』 同学社.
- 松崎寛/河野俊之1988『日本語教師・分野別マスタリングよくわかる音声』株式会社アルク.
- 本田義昭/吉中幸平 1994「学習独和辞典の課題」『西日本ドイツ文学』6号, pp.25-35.